

巻頭言 「ばらと聖書」

宇野 元

ばらのいろいろある楽しみのひとつが切花でしょう。私の場合は、ほんの数輪、あるいは一輪、小さな花器にさすだけの極めて素朴なものです。目立たない所にひっそりひらいている花を発見すると、よろこんで家に入れます。牧師館の玄関前のばらのなかに背のひくい株があります。おまけにうなだれて咲くため、なおさら地味な感じがします。このばらは花器に活けるとまったく別の表情をみせます。貧しい言葉でお伝えするのは難しいのですが、おいしそうな果物の印象と、その印象によく調和する快い香りを与えます。静かにばらに向かうと、どのばらも打ちとけて、自分の秘密を知らせてくれるように思われます。

花びらの多い優しいばらを歌うリルケの詩のなかに、こんな言葉があります（1914年の作「きょうお前のために」より）。

谷々がぎっしり詰まった谷のように
自らの中にあって重みを湛えている

今からおよそ 100 年前、リルケが生きた時代のばらは、いわゆる現代ばらの黎明期に当たっていて、花の重みでうつむくものが多く、古典的なばらの面影を残しています。ひらいた花びらの内側にたくさんの花びらが重なり合っています。ただ外側の世界が存在するだけではなく、外側の世界と共に豊かな内側の世界が存在する、それをばらは、無言のうちに教えてくれるような気がします。私たち人間も内容の詰まった存在です。そして、信仰はたんなる考察ではなく、たんなる世界観ではなく、存在全体による信頼です。たんなる感情の事柄でもなく、理性の働きも結ばれています。

私たちは「外側」に注意を誘う文化のなかに生きています。視覚的側面に重点を置いた美のイメージ。目に映るものの過剰な強調。……。現代の人間は一面的な自己理解に陥る危険にさらされていると思います。人間は豊かに創られている、内部の微細な襞にいたるまで緻密に組み立てられている、そう聖書が教えてくれます。「わたしは驚くべきものに造り上げられている。御業がどんなに驚くべきものか、わたしの魂はよく知っている」（詩編 139, 14）。私たちの存在の全体が御手のなかに置かれています。私たち一人一人に神の愛という秘密が与えられています。私たちの人生にも。人生の喜ばしい側面も困難な局面も、愛の御手に支えられています。